

美術は観るためのもの？

美学美術史学

美術館を訪れる際、皆さんは展示されている絵画や彫刻の前に立ち、作品をじっくり観察して、その美しさを愛でたり、表されているイメージを読みとくことに没頭することでしょう。時に作品の傍らに付された解説を読み、作品の制作背景や作者について理解しようと努めるかもしれません。美術作品を「鑑賞」することに慣れている私たちですが、一般的に作品に触れたり使ったりすることはタブーとされています。しかしながら、現代的な意味での美術館が確立する以前、絵画や彫刻等の美術作品の多くは、単に見て楽しむためのものではなく、何らかの目的のために使用することが意図されていました。すなわち、特定の人物のため、或いは特定の空間において、ある種の役割・機能を担っていたのです。例えば15・16世紀の西欧において、絵画・彫刻の多くはキリスト教的主題を扱ったもので、それらは主として公共の聖堂や個人の邸宅に設置され、礼拝や個人祈祷が行われる、宗教的な空間を整えるために用いられました。それらは実際に手で触れられ、時にその他の芸術作品と組みあわせられ、イメージの前で宗教的行為を行う者たちを、敬虔な祈りへと誘う道標としての役割を果たしていたのです。オリジナルの「場」から引き離され、美術館という新たな空間に設置された際、それらは本来の機能を失い、私たちの鑑賞の対象となるのです。美術館を訪れる際、作品が何を表しているかだけでなく、何故生みだされ、どのような役割を果たしていたのか、少し立ちどまって考えてみてください。見ているだけでは難しいかもしれません。そのような時、美術史の本を手にとってみてください。イメージの内奥に広がる歴史を繙き、作品と対話するための手掛かりが見つかるかもしれません。

杉山美耶子 准教授



カルカーのヤン・ヨーストに帰属《聖母の七つの悲しみ三連画》、1505年頃、スペイン、パレンシア大聖堂

夏の暑さより堪えるもの

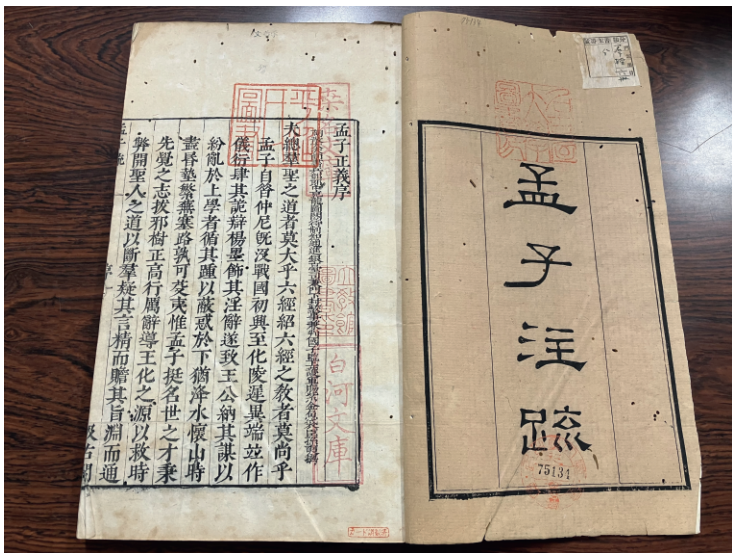
中国哲学

皆さんは夏がお好きですか。七月に入り、いよいよ夏本番です。海開きや夏休みが楽しみという方もいらっしゃると思います。反対に、「夏は暑くて嫌いだ」「夏は暑くて疲れる」とお思いの方も大勢いらっしゃるでしょう。私は後者に属します。中国古典でも、やはり夏の暑さはつらいものだと思われていたようです。たとえば「夏(か)日(じつ)畏(おそ)るべし」、すなわち「夏の日差しは恐ろしい」という言い回しが、西晋時代の文章中に見えています。(出典：『左伝』文公七年「趙盾夏日之日也」杜預注)

一方で、夏の暑さよりも堪えるものがある、とも中国古典には記されております。「肩を脅(そびや)かし諂(へつら)い笑うは、夏(か)畦(けい)よりも疲(つか)る」(出典：『孟子』滕文公章句下)。「肩を脅かし」は肩を縮める媚びた姿勢のこと、「諂い笑う」は相手を喜ばせるために無理に笑うこと、「夏畦」は夏の日照りの中での耕作、という意味です。つまり、「おもねるために、肩を縮めて無理に笑うことは、夏の日照りの中での耕作よりも疲れることである」という意味になります。これは恥の大切さを教えた言葉で、孔子の弟子である曾子の言葉とされています。「夏の暑さよりも、媚び諂う恥のほうが堪える」と曾子は言っているのです。

これからまだまだ暑い日が続きますが、「肩を脅かし諂い笑う」という恥よりはマシだと思いにあって、共にこの夏を乗り切りましょう。ちなみに、これは余談ですが、私は普段から「肩を脅かし諂い笑」っておりますので、恥よりも楽な夏の暑さは、簡単に乗り越えられそうです。(念のため言っておきますが勿論冗談です。)

荒川兼汰 博士後期課程2年



『孟子正義』(名古屋大学文学部 中国哲学研究室 所蔵)

日本語を通して「人」について考える

日本語学

「いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。(今では、もう昔のことになるが、竹取の翁という者がいたのである。その翁は山野に分け入っていつも竹を取り、その竹を種々の物を作るのに使っていたのである。)」これは、1000年以上前に成立したとされる現存する日本最古の物語『竹取物語』の冒頭です(本文・訳は小学館『新編日本古典文学全集』による)。この文章は現代に生きる私たちが使う言葉づかいとはだいぶ異なるものに思えるかもしれませんが、しかし、社会やそこに存在する人々が変わっていくのと同じように、言葉も1000年という長い時間をかけて少しずつ変わっていきます。現代でも「ら抜き言葉」や新語の発生などがあり、現在進行形で言葉の変化というものは起こっています。

では、なぜこのように言葉は変わっていくのでしょうか。そしてなぜ新しい言葉は多くの人に使われるようになったのでしょうか。このような問いを探っていくのも日本語学の分野・専門の一つの研究です。それは、社会的な変化だったり、人の価値観の変化だったりというものが答えになることもあります。

私は、言葉とは自分を表現したり他者と関わり合ったりするためのものだと思っています。つまり、言葉と人が人らしくあるということは密接に関わっているのではないかと思うのです。上記の問いへの答えになり得るものも、人の営みと関連しています。それを踏まえて、言葉を研究するということは人の本質の一端を知ろうとすることであり、だからこそ日本語学は面白いと感じています。時代を経て紡がれてきた日本語について探求し、それを言葉として用いてきた「人」について考える面白さを体験してみませんか。

松本優 博士前期課程1年



日本語学のリテラボ



月刊名大文学部

第146号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2025年7月10日発行